

戯曲『女人正機』
によにんしようき

三幕九場

天瀬裕康



時代と舞台の背景

講和条約が発効し、条件付きながら独立を回復した昭和二十七年（一九五二）年当時、浄土真宗の信仰厚い、広島における佐々木家の母娘の生活から始まる。そして久子たちの上京後における、昭和三十年から五十六年にかけて、七人の広島出身者による「七の会」や「賀茂鶴会」のメンバーなどをまじえ、久子を主体として事態は進行する。それは日本が戦後を脱して高度成長に向かい、野球の広島カープが優勝し、やがて日米貿易摩擦が起こる時代だが、佐々木久子が女の意地をかけて、日本の酒文化を護ろうとした時代でもあった。

登場人物

佐々木久子 『酒』編集長、愛称チャコ、昭和二年生まれ
澄子 久子の妹、昭和八年生まれ
吉江 久子の母、明治三十四年生まれ
清種 徹照 正覚寺の跡取、のち住職、昭和六年生まれ
火野 葦平 作家、明治四十年生まれ
梶山 季之 作家、通称カジさん、昭和五年生まれ
桂 芳久 作家、昭和四年生まれ
木村 功 俳優、大正十二年生まれ
杉村 春子 女優、明治三十八年生まれ
藤原 弘達 政治評論家、大正十年年生まれ

阿川 弘之 作家、大正九年生まれ

石本美由起 作詞家、大正十年生まれ

小堺 照三 株式新聞社社員・作家、昭和三年生まれ

土井千代吉 杜氏、俳人、大正十三年生まれ

飲屋の女将 五十歳くらい

汽車の車掌 声だけ

汽車の乗客 数名

酒場の客 数名

第一幕

暗闇の中に読経が流れている。

——幕上がる——

薄い中幕を通して人影が写っている。読経が終りに近づき、中幕も上がる……。

場割

第一幕 第一場 昭和二十七年七月、広島市南千田町（現・

中区）の家、

第二場 昭和三十年一月、同じ場所、小雪

第三場 その翌月、中幕のまえ、背後に蒸気機関車

第二幕 第一場 上京後の貧乏時代。ハモニカ横町はずれの

飲屋

第二場 昭和三十二年春、原宿にある久子の部屋

第三場 同じ部屋。昭和三十五年一月

第二幕 第一場 昭和四十七年以後、中幕のまえでの旅

第二場 昭和五十年、東京のホテル

第三場 昭和五十六年、久子の家

還來生死輪轉家（げんらいししょうじりんでんげ）
決以疑情爲所止（けつちぎじょういししょうし）
速入寂靜无爲樂（そくにゆうじやくじょうむいらく）
必以信心爲能入（ひつちしんじんのうにゆう）
弘經大土宗師等（ぐきょうだいじしゅうしとう）
拯濟无邊極濁惡（じょうさいむへんごくじょくあく）
道俗時衆共同心（どうぞくじしゅうぐどうしん）
唯可信斯高僧說（ゆいかしんしこうそうせつ）
南无阿彌陀佛（な—もあ—みだああんぶ—）
南无阿彌陀佛（な—もあ—みだああんぶ—）
何无阿彌陀佛（な—もあ—みだああんぶ—）……

溶明

第一場

戦後の広島、背景に原爆ドーム、手前にブラック風の家の内部を描いた絵、仏壇が見える。その手前に床の高さの台、畳が敷いてある。佐々木家の当主竜三郎が死んで丸二年が経った昭和二十七年七月五日、三回忌の法要がすんで、雑談も終わりがけたところ。

吉江 ……（団扇で煽きながら）徹照様も、よいお説教をされるようになられて、皆様、ご安心でございましょう。

徹照 いやあ、まだまだ……ほんの使い走り程度でございませう。代理が務まるどころまでも参りませぬ。

吉江 とんでもございませぬ。立派なお勤めでございませう。

読経といい、お説教といい……

久子 子どものころを思い出しますわ。

徹照 そうですわねえ、久子さんは勝負なお姉さんでした。

吉江 三つ年上でしたが、お転婆でしたよねえ。（笑い）。徹照様はお利口で……私どもはみんな、広島県山県郡安野村の出身でございまして、先祖代々長光山正覚寺、つまり、あなた様のお寺の門徒だったのでございます。佐々木の家は広島に出ましたが、先代の政吉さんなど、ずっと正覚寺様のお世話になっております。

徹照 皆さん信心深い方ばかりで、（吉江に向かって）ご主人

の龍三郎さんは、昭和二十四年に、数寄屋造りの客殿を建立寄進して下さいました。ここに泊られた本願寺の布教師様は、ご主人のような方を大工菩薩と呼ぶのだ、と言っておられました。

久子 大工菩薩という言葉は初めて聞きました。

吉江 もつたいないお言葉でございます……龍三郎は、あのあとから原爆症が進みましてね、翌年の七月五日に亡くなりまして、三回忌を迎えたわけでございます……徹照様も安野から出て大学の付属中学へ入られたので、原爆に遭われてしもうた……。

徹照 はい、全身の三分の一ほど火傷しました。全身にウジがわきましてのう……。

吉江 それが奇跡的に助かって、龍谷大学に進まれましたが反抗的で、僧職につくことを拒否しとられるちゅうて、門徒も心配したもんですが、よう立ち直って下さいました。

しかも立派なお勤めをされるようになりました……。

徹照 いいえ、住職の偉さが少し分かりかけたところでございます。父・信登の説教には頭が下がります。

吉江 たしかに信登師のお説教は抜群でございましたが、あなた様のお話は分かり易くて、引き付けられました。

澄子 お坊さんの話って抹香臭いものだと思つてましたが、今日の話は面白かったわ。

久子 (澄子に) 失礼なことを言っちゃあダメよ。

徹照 いえいえ、この家の方はみんな信心深いから、私のよ
うなもの話でも、分かって下さるのでございましょう。
それでは、そろそろ(立ち上がる)……。

吉江と徹照が下手に出て行く。久子と澄子は後片付け
をしていると吉江が戻ってくる。三人が話し込む。

澄子 お父さんが死んで、もう二年過ぎたのね。

久子 そう三回忌ねえ……(遠くを見るような風情で)お母さ
んは、ずいぶん苦労したよね。速くて長い月日だったわ。

吉江 思い出しとくないことばかりじゃった……。

澄子 お父さんが血を吐いてからは、お母さんはずっと大変
だったよねえ。

吉江 「母の日」をしてくれて有り難うよ。

澄子 五月の第二日曜の「母の日」が一般化したのは、
昭和二十四年からだけど、お父ちゃんが生きてるあいだは、
どうも、やりにくかったの。あの暴君が機嫌を損ねたら
いけないもんね。あんなに身勝手な明治男は、いまだき流
らないわ。大工菩薩という言葉、ムカツときたわよ。

久子 でもねえ原爆のときには、お母ちゃんと私は、父さん
が火の中から救い出してくれたんだから、あまり悪くも言

えんのよねえ。

吉江 そうだったねえ。家が倒れて、火が近づいてくる……
そのとき、あの人の声がしたんよ。「久子、吉江、すぐ助け
てやるぞ」ってね。

久子 家には年とつた大工さんが、四人いたのよね。兵隊に
行けないほど年寄りだったけど、父ちゃんと五人でジャッ
キを使って、屋根や梁はりを起こして助けてくれたんよ。それ
から元安川沿いに歩いて逃げたのよねえ。

吉江 ほうよ、風上から風下へ火が吹き寄せてのう……地獄
みたいじゃった。

澄子 私は田舎へ行つとつたけん、あのとまのことはよう分
からんけど……。

吉江 思い出しとくないよ。ピカドンのあとのことはのう。

久子 上の兄ちゃんは復員してきたけど、酒と麻雀ばかりし
ている。次の兄ちゃんは青年団の団長をして、復興だの平
和だのと頑張ってるみたいだったけど、私たちの生活の面
倒はみてくれなかった。男はあてにならんよね。姉さん夫
婦は四人の子どもを連れて帰ってくる……いいことなしで
苦労しているうちに、父ちゃんが死んだのよね。昭和二十
五年七月五日、原爆症で、たくさん血を吐いてたわね。

澄子 そしたらABC C、原爆傷害調査委員会ってヤツがす
ぐやつて来て、「解剖させてくれ」と言ったでしよ。

久子 あのとのお母ちゃんは、強かったわ。断固として拒絶したもんね。

吉江 みんな過ぎたことよね。辛いこともあったが、いいこともあった。さあ、掃除をときましよう……。

暗転

第二場

昭和三十年正月、以前の部屋、吉江と澄子が炬燵に入っている。蜜柑を食べながらの話。

澄子 ……久子姉ちゃん、いい人が出来てみたいんだけど、どうなったのかな？

吉江 NHKの人のことかいね……。

澄子 そうらしいわね。あそこの職場は飲ん兵衛が多いんですって……オードリ・ヘプバーンに似てるって、……煽られて夜遅く帰ることがあるでしょ。

吉江 お酒のことなら心配ないよ。なにしろ四、五歳のころから飲んでね、平気なんだから。お酒で失敗することはなかるうね。お父さんが派手好きで、なにかという職人衆を集めて宴会をしたら。宵越しの金は持たない主義だけど、正月には獅子舞や伊予万歳に祝儀をはずんでね、東

京から歌舞伎が来ると、寿座の棧敷に大工や左官さんや家族を引き連れて総見をやるんよ。春は花見で女の子には花見小袖を慎重するし芸者さんも呼んでくるし、ご自分でも太鼓を叩いてドンチャン騒ぎをなさる……。

澄子 あっ、姉ちゃんが帰ってきたわ。

久子 (ちよつと間をおいて炬燵に入りながら) ただいま。

澄子 昔の話を聞いてたところなんよ。私はちっちゃくて、よく憶えていないころ……。

吉江 久子はお転婆で、よく男の子と遊んでいたよ。サッカーやドッジボールをしたり、川で泳いだりしてね……日本舞踊も習ってたけど。

久子 (なんとなく沈みがちに) そんなときもあつたわねえ。

吉江 お父さんはね、軍部の仕事もしておられたけえ、戦争中でも、わりと贅沢ができたんよのう……。

澄子 それで姉ちゃん、芸能が好きになったんかいね？

久子 そうねえ……(少し話に乗ってくる) 戦後の私は舞踊教室を開いたり、新劇をやったりでね、県の青年演劇コンクール入賞したわ。東京で開かれた全国青年演劇祭でも、偉い先生から褒められたんよ。盆踊りの指導もして、二万人の盆踊り大会も成功させたわ。

吉江 あのころはのう、あつちでもこつちでも、盆踊りが盛んじゃったよ。戦争で沢山の人が死んだけえね。

澄子 炭坑節をよく聞いたもんね。

吉江 お隣の呉では末永って人が、入婿して鈴木になったんだけど、市長さんになってからは盆踊りに力を入れすぎたもんで、盆踊り市長と陰口されていたそうよ。

久子 私は盆踊りばかりした人と違うけえね。昭和二十四年の五月に広島と長崎の青年交換会を作ろういうことになってね、長崎の青年団が来ちゃった。翌年は長崎の番で、次の兄ちゃんと一緒に行ったんよ。レセプションは長崎宝塚劇場でね、私は「十三夜」を踊ったの。そしたら長崎の青年に求婚されちゃったんよ。

澄子 ほいで、どうなったんね？

久子 ドローン・ゲームかな。いつの間にか立ち消えよね。男には縁がないんかいなあ……永井隆博士のお見舞いに行ったら、「世界平和のため頑張って下さい」って握手して下さったけど、こりゃあ別問題よ……。

澄子 本をたくさん書いてるお医者さんよね、『この子を残して』とか『長崎の鐘』だとか……サトウハチロー作詞で古関裕而作曲の「長崎の鐘」もあの人のことでしょ。

久子 あんた、よく知ってるのね、貧乏のどん底だったけどねえ。

澄子 父ちゃんが死んでからあとの数年間は、ひどい生活だったわねえ。父ちゃんの気前よすぎたんで、借金のため家

も屋敷も取られてしまった……母ちゃんは山口県の建築現場で、賄婦として働いてたわねえ。姉ちゃんも仕事に出だして、いろんな雑字や情報を持って帰ったのよ。

久子 最初は進駐軍関係でね、連合軍総司令部の下に民間情報局というのがあって、その中の青少年指導事務所というところだった……英語が出来ないから苦労したけど、このボスはイギリス軍の将校でね、これが紳士なのよ。父ちゃんとはタイプが全然違うの。

澄子 なんだか分かるような気がするわ……それからNHKに入ったでしょ。

久子 昭和二十七年に対日講和条約が発効して、連合軍関係の仕事がなくなったんで、広島ユネスコ協会の仕事もしたけど、そのあとNHK広島の事業部でね、公開番組を手伝ったり、放送原稿の整理をしたり、まあ雑役係よ。そのうちに映画の指標を書かせてもらったり、NHKラジオで映画や文学のお喋りをさせてもらったり……そのうちに、ある男を好きになったけど、(落ち込んだ感じに戻って)振られてしまったのよ。

澄子 (少し気遣いながら) そうだったの。うまくいってる、と思ってたんだけど……。

吉江 男はみんな身勝手だねえ、それに社会の仕組みが平等に出来とるんよ。私が嫁いできた佐々木の家も、私にと

つては生き地獄みたいじゃった。くつろいで休む時間ものうて、朝から晩まで働かされた……嫁というののはのう、給料の要らん女中で、子どもを産むための生き物でしかなかった。まあ日本中が、似たようなもんじゃったがのう。

久子 それにしても、よく産んだものねえ……女、男、男、男、女、女……。

澄子 ほんまにねえ。それにお父ちゃん、あげえな性格じゃけえ……金が入ったらパツと使う、借金が出来ても平気……なにが大工菩薩よね。

吉江 じゃけんど信心だけは、お持ちでのう、正信偈なんかは暗記しておられた。浄土真宗の教えだけが、私の心の支えじゃったよ。男女差別のある宗教は多いようじゃが、浄土真宗本願寺派の教えの中には、差別はないのよのう。「女人正機」という言葉がありましようが、「正機」というのは、私の教えや救いを受ける資格をも持った人のことで、女も救われるんじや。

久子 ほいでも「女人正機」というたら、「罪深い存在である女をまず救う」ということじゃあないの？ だったら、その基には女性蔑視があるんじやないかしら？

吉江 いいえのう、親鸞聖人の教えの中には、なんの差別ものうて、男女平等なんです。

久子 それなら仕事も、男女平等にさせて欲しいわ……私、

東京へ行きたいの。

澄子 (驚いた風情で) お姉さん、本気ね？

久子 本気よ、職場がうまくいってないの。

吉江 それにしても、なして、また急に！

久子 ずっと考えて決めたの……。

溶暗

第三場

中幕のまえ。昭和三十年二月初め、久子の上京。中幕にSL急行「安芸」号のシルエット。雪がちらほら降っている。母と妹だけが見送る広島駅のホーム。

吉江 兄ちゃんたちは、ずいぶんと久子の上京に反対したよのう。なんの特技も才能もないのにいうて……じゃけど、憎くて言ったわけじゃあないけん、辛うなったら、いつでも帰ってきんさい。

久子 それよりお母さんが東京へ来ればいいわ。私、兄ちゃんたちとは会いたくないの。マスコミの仕事が向いてる、と言ってくれた人もいるの。

吉江 マスコミの仕事いうても、すぐありやあせんよ。私にしても、そう簡単に東京へは行けんよ。辛うても頑張った

家じゃけえね。長崎の実家へ帰りたいと、思ったこともあったよ。じゃけんど、そのうちに実家の母親が死ぬと、もう帰るわけにもいかん。「女、三界に家なし」という言葉があるけど、まあ、そんなものかねえ。あの家しかなかったんじゃ。

久子 私はもう、広島にも男にも未練はないの。失恋したときには、死ぬことを考えたわ。でも、今は違う……東京に行ったら、なにかに熱中できると思うの。

吉江 広島にいても、あんたには熱中できるものがあるよ。

……広島カープ球団が誕生したのは、お父さんが死んだ年だったかいね。

久子 そうねえ、樽募金が始まったころには、のめり込んでゆくの私にも分かっていたわ。でも今は、熱中できる仕事を探したいの。

澄子 私も東京へ行きたいわ。

久子 落ち着いたら呼んだげるけえね。

澄子 もっと近けりゃあ、ええのにねえ。

久子 ほいでも、昭和二十五年十月のダイヤ改正でずいぶんと早くなったんよ。「つばめ」号なら東京―大阪間が八時間で、これはもう戦前の水準に戻ってるたわ。

澄子 でも「安芸」で東京までは、半日以上かかるじゃあないの。

久子 来年は改正があるそうだし、速度だって、もっと速くなるでしょうよ。

澄子 姉ちゃんがいなくなると、寂しくなるわ……。

久子 落ち着いたら呼ぶからね。澄子、約束よ。指切りしましょう、指切りゲンマン、嘘ついたら（言いながら泣きたす）針千本……。

泣きながら話していると発車のベルが鳴る。

吉江 さあ、汽車が出るよ、（発車のベルを聞きながら）早う乗りんさい。

澄子 元気でね！

久子 （中幕の重ね目から奥へ入り、涙を拭きながら、乗車する格好で）じゃあねえ……。

溶暗

発車の汽笛とともに、気車のシルエットが下手から上手に移動。それにつれて吉江と澄子も歩き、やがて上手に消える。しばらくシルエットの移動だけ。ときどき汽笛と久子のすすり泣きの声。中幕の中央を一部開けて、車内の久子が見えるようにする。そこへ車内放送が流れる。

車掌 (声だけ) 広島からご乗車の佐々木久子様、電報が届いています。車掌室まで取りにお出で下さい。広島の佐々木久子様……。

久子 (涙を拭いて立ち上がる) はあーい……。下手に向かって姿を消す。しばらくして席に戻り、電文に目を通す) ああ、あの人からだわ……。

山陽本線と呉線が分かれる三原駅、汽車が停まる。久子は席から立ち上がり、電報を握つて中幕のまえへ、ホームに出る。久子にスポットライト。以下、久子の独白・独演で乱れる心を表現。

久子 (電文を読み始める) ヒサコ カエツテオイデ ケツコンシヨウ……あの人からの電報、どうしよう……。ぐるぐる
とホームをうろつきながら帰ろうか……。今ならまだ間に合うんだわ……。あの人のところへ戻ろうか……。いや！ 帰るも
んか、私は広島を捨てるの！ でも、帰りたい(しゃくり上げて泣く)

汽車がガタンと動き、中幕の影が揺れる。久子は汽車の昇降口を示すように開けた部分に走り込み、観客の

ほうに向いて、声高に告げる。

久子 昭和二十年から二十九年までの十年間、私は力一杯、青春時代を駆け抜けたんだわ。でもその最後に待っていたのは失態だった……。今となっては、お父さんだって、恋しい。でも、広島はもう厭！ 私、東京へ行くの。広島とは、お別れよー(激しく泣きじゃくる)。

第二幕

上京後の昭和三十一年から火野葦平死亡の三十五年にかけての、波乱万丈、貧乏を乗り越えてゆく時代。

第一場

火野葦平や株式新聞社の小堺昭三のお供をして、銀座・新宿・池袋・上野・澁谷と飲み歩く久子。新宿のハモニカ横町はカウンター主体の小さな店が並んでいるが、そのはずれの「よしだ」は、広島出身者も立ち寄る居酒屋。カウンターには、背を向けた客が二、三

幕

人。四人用のテーブルに久子たちが座っている。

久子 ……私ねえ、なんだか弱気になってきたの。もう雑誌『酒』の編集はあきらめようかと思うの。先生は「頑張り！」って言って下さるけど……。

火野 チャコちゃん、あんたは簡単にくたばるような女じゃあないよ。お母さんや妹さんも上京されたんだろ？

久子 ええ、私が上京してから一年後、昭和三十一年に呼び寄せたんです。そしたら『酒』のほうは大赤字になって、廃刊しかないような気がしましたんです。

火野 だったら、そのためにも一踏ん張りせんといかんとばい。わしは福岡弁じやが、お袋は広島奥の産たい。半分は広島県の血じや。『酒』を廃刊にはさせん。

小堺 佐々木さんは、運がよすぎたのかもしれないね。上京してすぐ、二十五歳で編集長になったんだからね。

久子 そりやもう、大谷社長のお蔭です。

小堺 社長のほうも、佐々木さんが現われたので、これ潮時とばかりに編集の席を渡したんですよ。

火野 まあ、いろんなことがあるのが人生たい。わしは別口が待つとるんで先に失礼するが、チャコには広島軍団や酒飲みたちもついとる。(小堺に向かって)チャコちゃんには、わしの秘策のことも伝えといてくれ……。

小堺 承知しました。

火野 葦平が腰を浮かしかけると、俳優の木村功が入ってくる。

火野 ちようどいい具合に広島人間がきた。交代じや。

木村 なんだか追い出すみたいですが……。

火野 おまえさんに追い出されるほど^{もつろ}著確はしとらんが、まあ、役者には勝てんかな。(女将に向かって小声で)じやあ、あとは頼んだぞ……。

女将 はいはい、分かりました……お気をつけて。

木村 (火野のあとに座りながら女将に) コップ酒と冷や奴半丁で、ねばられたんじやあ儲けにはならんな。今日のは火野先生にツケとくつてことだろが、ぜんぜん払わないことだつてあるんじゃないのか？

女将 いいんですよ、そんなこと。出世払いということにしましょうよ。

すると若い作家の桂芳久が入って来る。椅子を一つ引っ張ってきて。木村の横、下手に割り込む。

桂 ちよつと余計なのが来たかな。まあ、同じなのを貰いま

しよう。

小塚 ちようどいい。佐々木さんが弱気になってるんでね、みんなで支援してほしいんだよ。火野先生は、生きている限り『酒』への原稿はタダで書く、とおっしゃった。ついでに言うと、私は先生の東京鈍魚庵の秘書になるため、株式新聞社を辞めることになりました。本格的に作家修業をしようというわけなんだ。桂さんより出遅れたからな。

桂 僕もスランブ気味なんです。昭和二十八年の『群像』八月号に「刺草の蔭に」を発表したときには、話題になってね、少し天狗になったけど、あとはパツとしない。

久子 桂さんは秀才だもんね。新制の国泰寺高校時代に同人誌の『ル・アミー』を創ったわね。広島では純文学のトップスターだったのよ。

桂 あれば友人つて意味です。(ちよつと講義調に)慶応の文学部へ入り、昭和二十八年には、第三次「三田文学」を復刊して編集担当になりました。

木村 桂さんは学者のほうに向いてるかもしれないね。まあ、金持ちでないって点では同じかもしれないが……広島出身者による「七の会」というのがあったよね。広島を流れる七本の川と、質屋通いとを絡めて七人が作ったんだ。最年長は杉村春子さん、それから阿川弘之さん、政治評論家の藤原弘達さん、それから私までが大正生まれで、佐々木さん、

桂さん、梶山季之さんと昭和生まれを入れて七人です。

小塚 シチですか、ヒチですか？ ヒロ島がシロ島に聞こえるときもありますよね。

木村 中間でしょうね、ナナではないようだけど(笑い)。大先輩の杉村春子さんが築地小劇場を受験したときね、広島弁がひどいので、審査員の青山杉作さんが落としてしまった。ところが、次回の作品でオルガンを弾く役が休んだので、黙って弾くだけという条件で採用になった……。

桂 あの人、たしか広島女学院の音楽の先生をしてらしたそうですね。

木村 それで助かったんだ……僕なんかだったら、それで一卷の終わりだった。

桂 杉村さんは別格としても、阿川くらいになると、僕らは声をかけにくいな。

木村 大丈夫さ。藤原弘達さんも三十一年に明治大学の教授になってから、ときどき政治討論会なんかでテレビに出てるけど、佐々木久子応援団員にはなってくれます。

桂 梶山季之は、すぐ動いてくれると思いますね。

小塚 じゃあこの「七の会」中核にして、輪を広げてみて下さい。火野先生も頼んで回られます。尾崎士郎さんは賀茂

鶴がお好きですが、あれは広島酒の酒でしょ？

久子 そうです、いい酒です。

木村 「七の会」は、これまで誰が代表という訳じゃあなしに集まってきたけど、この輪はいくら広げてもいい。呉市生まれの神山繁ってやつがいてね、昭和二十七年に文学座に入ってきたんだが、俳優の生活は山あり谷ありだ。こいつも呼び込もうかな。

久子 (涙ぐみながら笑ってみせて) 皆さん、有難う……。

暗転

第二場

昭和三十二年春、日曜日の午後。原宿にある久子の小さな部屋。母・吉江と妹・澄子が上京し同居。久子はここから『酒』編集室に通っている。吉江と久子が話し込んでいる。

吉江 ……この生活にも、どうやら慣れてきたよ。もう一年になるからねえ。

久子 そうねえ、私が上京したのが昭和三十年、一年経ってからお母さんと澄子呼び寄せたんじゃえねえ。

吉江 あんたが上京して当分は、心配でいけんかったよ。

久子 初めは、しんどかったよねえ。なんにも分かんずに飛び出して来たんじゃない。

吉江 兄さんたちも心配しとったよ。

久子 それでね、余計こと弱音は吐きとくなかった……求人広告は水商売みたいなものばかり。初めは青山に尚志館いうて広島大学の同窓会館みたいところに泊って、東京の街をほつつき歩いてね、原宿のタバコ屋さんの二階に間借りしたの。(回顧調に) 板張り三畳で、莫座を敷いただけの部屋だけど、文句は言えんよね……そこで頑張っていたら『朝日新聞』の求人欄に、「趣味の雑誌」編集記者募集というのがあるじゃあない！ さっそく行つたわよ。

吉江 そこが編集長にして下さった会社かい？

久子 そうよ。だけど順調にはゆかなかった……株式の新聞社でね、採用は一人なのに百人くらいきてるんだから。ダメだと思って、面接のときは好き勝手なことを喋ったわ。そしたら、なんと合格したんよ……その「趣味の雑誌」いうのがね、『酒』という雑誌だったの。酒好きの社長さんが、自分の趣味道楽で創刊されて、昭和二十五年と二十六年に合計四冊出しただけで休刊になったのをね、復刊することになったのよ。

吉江 そりゃあ、お誂え向きねえ。(笑いながら) あんたは三歳くらいから、お酒を飲んでたからねえ。

久子 そのままで言わなくてもいいじゃあないの。

吉江 だって、そのおかげで採用されたんでしょ。あら澄子

が帰ってきたようだわ。

下手の台所のほうでガタコト音をさせて、澄子が入ってくる。

澄子 食材を買い込んできたわ。お母さんだけでなく、私まで居座ってしまつて、姉さん御免なさいね。

久子 そんなこと気にしないでよ。

澄子 じゃあ今夜の晩ご飯、お母さんが作ってくれる？

吉江 そりゃあいいけど、まだ少し早いから、久子のお喋りをもう少し聞いてからにしようよ。いま入社このころの話が出ているところなんでねえ。

澄子 文壇関係の話なら興味があるわ。

久子 たいしたことじゃあないけど、とにかく入社してみると様子がおかしいのね。『酒』などという道楽雑誌に金を注ぎ込むのなら給料を上げろ、と言つて印刷所がストライキを始めたの。それで昭和三十一年に復刊一周年記念号を出して休刊……すると火野葦平先生が、「チャコが引き受けてやりなさい」と、おっしゃつたの。株式新聞社の小玉社長は気持ちよく譲つて下さつたし、事務所を貸して下さる方もいたわ。印刷所の社長と紙屋の主人は信用貸しで、半年ほど面倒をみて下さつた。ところが雑誌は、ぜんぜん売れ

ないのよねえ。もうダメ、と諦めかけたけど「七の会」も応援してくれる、仲間も増える……金はなくても知恵を貸してくれる人もいる。それで結局、直販形式にしたの。

澄子 なるほどねえ、姉さん憶えてないかなあ、広島図書って会社が『ぎんのすず』という本を出してたでしょ。あれも直接販売だったわ。

吉江 さあ、(立ち上がって) そろそろ夕ご飯の支度に取りかかりましようかね……。

第三場

溶暗

昭和三十五年一月中旬、同じ部屋。澄子は結婚して、近くのパン屋さんに間借りしている。

小堺 ……火野先生が佐々木さんのことを、ひどく気にされてましてね……順調にいつてますよ、と言つたんですが、変わったことは、ありませんよね？

久子 ええ、大丈夫です。周囲はだんだん賑やかになつてきました。「七の会」のことは、存知ですよね？

小堺 作家では阿川さん、桂さん、梶山さん、俳優の杉村さんに木村さん、政治評論家の藤原さん……おっと、佐々木

さんを抜かしちゃいけない。

久子 それが大きくなったんです。昨年「七の会」のメンバーが広島へ帰ったとき、賀茂鶴酒造の石井武志会長や東洋工業の松田恒次社長のお世話になったので、それ以後、毎年一回は集まろう、ということになったんです。これが昭和三十四年結成の賀茂鶴会の発端なんですが、「七の会」のメンバーのほかに、作詞家の石本美由起さん、画家の大歳克衛さん、俳優の平幹二郎さん、女優の佐久間良子さんたちね。それまでも飲み回ったお金は、たいてい石本美由起さんが払っていたわ。金回りも一番よかつたし、「飲みましょう」と言いだすのは石本さんだったから……。

小堺 これだけ聞けば大丈夫です。火野先生には、この様子をお伝えしておきますよ。(腰を浮かせながら) それじゃあ、お母さん、失礼します。

吉江が上手から急いで出て来る。

吉江 なんのお構いもしませんで……。

小堺 いえいえ、夕食時間にお邪魔しまして……。

三人が下手に消えると、上手から澄子が現われ、お茶の後片付けをする。吉江と久子はすぐ戻ってくる。や

やあって、三人が座って話を始める。

吉江 有難いことですよ、火野先生にはお礼の言葉もないでしょうが……。

久子 そうなのよ。私、火野先生を見てるとね、お父さんみたいな気がするところがあるの。体つきも似てるもんね。ずいぶん支えになっていただいたわ。月給八千円の時代、家賃が四千五百円だから食えない生活だけど、それでも一杯三十円のコップ酒を毎晩飲み歩いたの。尾崎士郎とか壇一雄といった先生方が、談論風発するのよ。『人生劇場』の尾崎先生はね、酔うと禪の上から角帯を巻いて土俵入りの格好をするの。高いお酒なら江戸川乱歩先生ね。新橋・赤坂・柳橋などの、超一流の料亭に連れて行って下さるの。

澄子 乱歩さんといったら、土蔵の中に蠟燭を灯して探偵小説を書いてた人でしょ。大丈夫なの？

久子 「チャコには女性的魅力がないから大丈夫」という説があったわ。

澄子 そんなことないわよ。姉さんはオードリ・ヘプバーンに似てるって言われてたでしょ。

久子 それはね私がガリガリに痩せて、髪型もポニー・テイルにしていたからかもね……乱歩は男色趣味があるから女には手を出さない、という話もあったわ。

澄子 なんだか薄気味悪いわねえ。

久子 ところが乱歩先生は常識的な人なのよ。学者タイプと
言ってもいいかな……心理学で使うロールシャッハ・テス
トというのがあって、あれで調べたら「正常」と出た
そうよ。

澄子 どうもイメージが合わないわね。

久子 でも、あのクラスの料亭になると、女将さんのたちの
話術もたいしたものなの。耳学問で少しは偉くなったわ……
でも、なんだか変ね。(急に気になりだした風情で) どうし
て火野先生、小堺さんを立ち寄らせたりしたのかしら？

澄子 ミステリアスな感じね。……あつ、そうだ、小堺さん
はね、芥川賞候補になりそうだって話よ。森下洋子さんは
上京するそうだし……。

久子 それは嬉しいけど、私、いやな予感がしてきたわ。

吉江 つまらないこと言わないで、澄子は早く帰らないと、
お家のことがあるでしょ……。

溶暗

溶明

一週間後、一月二十四日の夕方。仕事から早めに帰っ
た久子が、和服に着かえていると、澄子が血相を変え
てやって来る。久子のところの電話が通じなかったの

で、澄子のところに火野葦平の訃報が入った、という
ことらしい。

澄子 (おろおろしながら) 私の聞き違いだったらいけないか
ら、とにかく、すぐ連絡を取ってみてよ!

久子 おかしいわねえ、二十二日の夜、火野先生と電話で話
したばかりなのよ。でも……ばかばかしいと思って、言わ
なかったんだけど、私、昨夜、火野先生の夢を見たの……。

吉江 あんた、顔色が悪いわ。私も気になりだしたよ。

久子 それで、だから電話があつたの？

澄子 そうそう、たしか、あの人……小堺さん。

吉江 じゃあ、小堺さんにでも、電話してみたら？

久子 (電話のほうに歩みながら) どうも胸騒ぎがするわ。(夕
イヤルを回して) もしもし……、ああ、小堺さん、火野先生
お元気？

電話から漏れる声を拡大して聞かせる。小堺の声が冥
府からのメッセージのように流れてくる。

小堺 澄子さんから連絡がありましたか？

久子 ええ、気になる夢も見ましたし……。

小堺 そうですね、でも夢じゃあないんだ。北九州若松の書

齋で……突然死された……。

久子 なんですって!?

小堺 急なことなんでね、いま相談中ですけど、突然死となれば心臓発作か脳卒中……まだ意見が纏まらないんで、あまり喋らないで下さい。

久子 あなた、なにか隠してるようね!?

小堺 いずれは分かることだとしても、出来るだけ遅い方がいい……まえから高血圧はあったんですがね、とにかく、葬儀のこともあるし、すぐ九州へ行きます。

久子 私、(取り乱した風情で) どうしたらいいのかしら?

小堺 来られないほうがいいかもね。

久子 どうしてなの?

小堺 ショックが大きすぎますよ。

久子 ……分かったわ……でも私、やっぱり行きます。

久子は受話器を置いて泣き崩れる。少し離れた位置で聞いていた吉江や澄子も、事情は呑み込めた感じ。

澄子 (小声で) 私だってショックだわ。

吉江 泣きたかったら、泣くがいいよ。

久子 ……私、雑誌は続けるわ。結婚はしません。五年まえに広島を出るとき、結婚はしないことに決めたの。好きな

人も出来たけど、諦めたわ。(いささか錯乱気味) もう三十三歳になったんだもの。くじけちゃあいけないのよね。お母さん、それでいいかしら?

吉江 いいよ、いいよ。女の幸せは、結婚だけじゃあないんだからね……。

幕

第三幕

第一場

中幕に日本列島の地図が大きく写っている。和服の佐々木久子が上手から現われ、北海道の下あたりにつて、語り始める。昭和四十七年から五十年にかけて、柳女の俳号で俳句を詠みながらの酒の旅。

久子 火野先生が亡くなられたあと、昭和三十五年に「広島なまりをなつかしむ会」が生まれました。この年には、まだ十二歳の森下洋子さんが、バレリーナを目指して上京しました。脱線しましたが「なつかしむ会」のメンバーは賀茂鶴会とかなりダブってしまって、三十七年までに三回ほ

ど集まっています。メンバーの梶山季之さんは、仲間内では「カジさん」と呼んでいましたが、昭和三十八年度前期の直木賞候補になりました。結局、受賞を逸したので、ひどく残念がっていました。雑誌『酒』が売れ出したのは創刊の後七年目、昭和三十年代も終りに近くになったころですが、三十九年の二月には、尾崎士郎先生もお亡くなりになりました。でも仕事の方では（ゆっくり下手へ向かって歩き、北陸・東海の下あたりで停まる）四十二年に、幻の酒と言われた新潟の「越乃寒梅」を見付けました。これが機縁で地酒ブームが起こり、雑誌『酒』の名も広がりましたし、酒や肴についてのエッセイを書くようになりましたが、私が一番お伝えしなかったのは、お酒を作る人たちのことでもあります。ほら一人、年配の方が来てらっしゃいますね。あの、俳句もなさるんです……。

下手から鉢巻に印袴纏しるしはんでんをまとった、年配の杜氏とうじが登場。土井という名で、久子の眼前まで来ると、鉢巻をはずし肩に掛け、腰を折って挨拶する。

土井 先生、お久しぶりです。取材に来られるとかで、

お迎えに参りました。荷物が私がお持ちしましょう。

久子 いいのよ、手ぶらで旅行してるの。それから、先生は

止めて下さいな。（ゆっくり下手へ歩いて行く）新聞なんかでエッセイストなんて肩書きを付けたのがありますが、私は皆さんのお話を聞いて、日本酒のよいところを、宣伝をしているだけですから。

土井 有難いことです。

久子 その日本酒造りで一番大切な要かなめは、酒造り職人の蔵人くらびとを束ねる杜氏さんなのよね。「おやっさん」とか「おやじさん」と呼ばれる人たち…… お話を聞いてると、教えられることが多いの。

土井 でも、ほんものの杜氏は、少なくなってきました。コンピュータを使って、一年中、一定の品質を保つことが求められてるんで、麴こもや醪もろと話しながら、生き物相手の勘でやってるわしらは、いざれ消え去るでしょう。

久子 寂しいことを言わないでよ。私だって時代の流れが分からない訳じゃあないわ。だけど、痺れるほど美味いお酒は、機械製じゃあないの。猿がコンピュータを叩いても名句の生まれる可能性があるそうだけど、そうばっかりも言えないわね。

土井 はい、おっしゃる通りで……。

久子 私ねえ、いま北から南に向かって酒蔵行脚あしづりしてるんです。旭川は、北海道の灘なだですねえ。北日本は塩辛い味、西日本は薄味で、九州になると甘くなる。もちろん、これ

は一般論で、それぞれ別の味を出していらつしやる。……造り酒屋の御主人は資金と蔵を提供して、杜氏・蔵人に酒を造ってもらっていました。米を作る人の一部が季節的に蔵人になり、米と酒は一連のものだったんですね。それが機械化され、社長と社員になって……どうも面白くないわね。合理化とか、効率化というのは、文化を壊すのよ。私、俳句を作ったり、横道にそれて道草をくいながら行きますから、先に帰つといて下さい。

二人は下手へと歩いて消えるが、杜氏の土井はすぐ舞台に引き返し、観客に告げる。

土井 佐々木久子先生の口癖をお伝えしておきます。……日本酒は、あくまでも爛をして飲むもので、冷酒はダメだ、ということですよ。それから先生の俳句、(メモを取り出しながら)一月から十二月まで十二句を披露させて頂きます。

酒徳ある 人とすごさん 松の内

雪割りの 酒酌む旅は 艶だちて

流し雛 抱いてにっこり 嫁御寮

花と人 心寄せあふ 宴かな

緋鯉舞ふ 日を待ちもせず 君は逝き

味の旅 行きつく先は あなご寿司
短夜は 心つきあふ 酒縁なり
酔い泣きの 酒くむ今日は 原爆忌
木曾の秋 地酒のさかなは 手打そば
天高し 鯉おどる夜の 美し酒
寒き夜を 爛あつくして ひとり酒
凍雪を 踏んで情の 旅をゆく

告げ終わると土井は下手に消え、中幕の日本列島も消すと、上手から久子がよろよろと現われる。舞台中央に、スポットライトに当てられた久子が立つ。

久子 土井さんたちが造った美味しい酒を頂いて寝たのに、悲しい夢を見てしまったわ。血みどろの梶山季之さんが、助けを求めている……なにかあったのかしら？

溶暗

第二場

昭和五十年十一月末、東京のホテル。広島カープの優勝を祝う賑わい。「七の会」など、ゆかりの連中が集まっている。阿川弘之と藤原弘達、グラスを片手にし

て、和服姿の佐々木久子のところにやって来る。

阿川 チャコちゃん、おめでとぅ。

藤原 万年最下位のカープが優勝するとはなあ、君たちのおかげだろう。

久子 ええ、とつても嬉しい。でも、ちよつとだけ悲しい。

藤原 カジさんに見せてやりたかつたのう。

阿川 彼が香港で客死したのは五月十一日だから、半年のことだつたのになあ。

石本 (話に加わりながら) 吐血だから飲み過ぎだろう。

久子 そうねえ、カジさんのお通夜には、ゴールド・カモツルが数十本届いていたわ。(石本に) 先生も気をつけなきゃあ……。

石本 よう一緒に飲み歩いたけえのう。じゃが、わしやあ、チャコちゃんほどは飲んどらんぞ。

久子 最近ほ、回数で言うとお先生のほうが多いでしよ。

石本 まあ、「広島東洋カープを優勝させる会」を引きずつていったのは君とカジさんだよなあ。カープ球団が誕生したときは、僕はもう上京していたが、君たちは樽募金で球団が誕生したところからのファンだつたわけだ……。

久子 カープの日南キャンプを訪問したのは、昭和四十一年の二月で、石本先生にカジさん、漫画家の富永一朗さん、

落語家の三笑亭夢楽さん、それに私。

藤原 そして七月に、「広島カープを優勝させる会」を立ち上げた、というわけだね……。

阿川と藤原は話しながら場所を変え、桂芳久が加わり、人の移動は激しくなる。

桂 カジさんが死んだから、「七の会」では僕が一番若くなつた。彼が、あれだけ大量の作品を書くとは、思っていましたよ。

佐々木さんもたいした仕事をされましたが、『酒』の編集長になってしばらくして、もう三十歳を過ぎても、二十歳くらいにしか見えなかつた……。

久子 チビでヤセで、洗いざらしの時代遅れの洋服を着ているから、余計、幼く見えたのね。成熟した女の魅力なんかないんだから、もつぱら和服を着ることにしたのよ。ひどく貧乏だったときも、新宿の末広亭へ、落語を聴きに通いつめてたし……土着の日本文化への憧れ、そんなものが、あつたのかな。

桂 なるほど、酒、カープ、伝統芸能……なんだか一本、筋が通つていて素晴らしい。

久子 桂さんだつて、三田文学会の理事になられたし、北里大学教授だとか、学者になられたのよね。

桂 文学的には、阿川さんに遠く及ばない。『中国新聞』で原爆文学論争があったとき、総括をされたのは阿川さんだったよね。学者ということになると、藤原さんが大先輩に当たります……。

カープの応援歌が流れてくる。そこへ木村功がやって来て、桂芳久と並ぶ。

木村 なんだか高尚な話をしているようだが、『酒』の中で面白かったのは「文壇酒徒番外」かな。昭和四十年ごろに出たでしょ!?

久子 新年特別号の附録です。東は横綱が井上靖先生、大関が高橋義孝先生、(指を折りながら) 関脇が永井龍男先生で山口瞳さんの小結。西の横綱は河上徹太郎先生、大関は檀一雄さんで、吉行淳之介さんの関脇に小結のカジさん……。桂 さすがに、よく憶えますね。だけど、僕も記憶力はいほうなんです。読売テレビは、正月に「女流酒豪番外」をやっていました。こっちの「番外」はコザトヘンのない「付」だ。簡単な字を使ってみましたね。

木村 (ふと下手のカウンターの方を見て) ありゃー、杉村春子さんが来てらっしゃる。

久子 あら、そうねえ。私、ご挨拶に行ってくるけど、あな

たたちは?

木村 僕も行かなきやいけないな。文学座のボスだし、日本を代表する女優だから。僕は俳優座だけど、いろいろ不義理してるんで、すぐ失礼したいんです。桂さん、ちょっと待っててくれる?

桂 そりゃー、まあ構いませんけど、ちょっと一回りして、食べ物でも取ってこようかな……。

久子と木村は、カウンターの止り木に座っていた杉村に挨拶する。

木村 どうも、ご無沙汰しまして……。

久子 お忙しいのに、有り難うございました。

杉村 盛会でよかったですわね。仕事の途中を抜け出して来たんだけど、あなたたちに会えたから、義理はすんだ……。

木村 じゃあ僕、失礼します。

杉村 (ほっほと笑って) 無理しなくていいのよ。

木村が逃げるように去ると、久子が杉村の隣に座って訊く。

久子 なにかあったんですか?

杉村 たいしたことないのよ。私は青山杉作先生に落第点を付けられたけど、彼は俳優座で青山先生から演技指導を受けた。それから俳優座を出て青年俳優クラブを立ち上げたんだわ。そんなことを気にしてるのかな。のちの劇団青俳……岡田英次さんや西村晃さんと一緒にね。ところが最近、経営状態がよくないの。それで、ちよつとばかりね。

久子 映画に出てらっしゃるのは、そのせいですか？

杉村 それだけじゃなくて、新劇人も映画へ進出すべきだというポリシーも持つてるようだけど……。

久子 あの人の実家は戦前の千田町で、近くなんです。私の母は芝居好きで、今でも市川雷蔵さんが好きなんです。私も若いときは青年団で芝居をやってたんで、近親感がありましてね、「罪と罰」のラスコルニコフなんか好きでした。映画では『真空地帯』のすねたような兵士……。

杉村 そうだったの。じゃあ、なにかの折には、支えになつてあげてよ。私はそろそろ失礼するから……。

背後にカープの応援歌が流れている。

暗転

昭和五十六年七月五日、久子の家、吉江も同居。以前よりは少し綺麗な内装。澄子も来ている。

吉江 来年はお父さんの三十三回忌になるよのう。今日は身内だけでお経をあげたが、来年は正覚寺住職の徹照さんに来てもらうて、ちゃんと法事をせんにやあいけん。

久子 そうねえ、徹照住職にお願ひするんだったら、早めに連絡しとかなくちやあね……あの人、売れっ子だから。

吉江 いい説教をされるからのう。私が死んだら枕^{まくら}經をお願ひします、と頼んであるけど……。

澄子 死んだ人の枕元で読むお経のことね、だったらお母さん、そんな話をするのは、まだ早いわよ。

吉江 ボケんうちに、ちゃんと準備をしとかなとなあ。

久子 私だって、澄子だって、いつポツクリいくかも分からんけどね。私ねえ、また人が死ぬる夢を見たの。つい先日、火野先生の突然死は、病氣じゃあなくて自殺だった、という話を聞いたのが原因かもしれない。

澄子 まさか、私が死ぬるんじゃないでしょうね？

久子 そりゃあ違うわ、俳優の木村功さんなの。お母さんも芝居が好きだから、憶えてないかしら、千田町出身で俳優座に入った人……。

吉江 うん、映画で見たよ。『七人の侍』に出ていた。

第二場

澄子 俳優座から出て、劇団青俳を作ったけど、二年ほどまえに倒産したわね。

久子 それでね、彼は木村功演劇事務所というのを作って、態勢を立て直そうとしているの。その第一回公演がウイリアム・ギブソンの「ツー・フォア・ザ・シーソー」……末木利文の演出で、相手役は高林由紀子。『二人でシーソー』という題で、去年の十二月には、広島でも上演したんですよ。広島市民劇場という演劇鑑賞組織の、例会での公演だけどねえ……ところが、その木村さんが、手を振って消えて行くの。夢の中だね。

澄江 枕元に立つ、って言う、あれかね。でも、逆夢って言葉もあるでしょ、いいことがあるかもしれんけえ、まあ考え込まん方がいいわ。

久子 そうねえ。でも私、昔からカンの強い子だったでしょ、予想外に私のカンは当るのよ。なにかが起こる……。

すると電話が鳴り、三人は顔を見合わせる。不吉なムード。久恵が電話に出る。

久子 はい、佐々木でございます。……えつ、木村さんが、お亡くなりになった……

電話の声 (遠くて吉江や澄子には聞こえない) ……。

久子 ……明日、密葬……

電話の声 ……。

久子 ……はい、分かりました……

重苦しい雰囲気の中、電話を切った久子が二人のところに戻って来る。

久子 杉村さんからだった。昨日、突然死だったらしいの……葬儀は明日、ごく内輪で済ますんだって……。

吉江 杉村さんなら、よう知つとるよ。石山春子さんいうて、いまの土橋から河原町あたりに家があつての。当り役といえは、『女の一生』の布引けい……。

久子 (調子を含ませるように) そうねえ、私なら、『欲望という名の電車』のブランチ・デュボアを採るかなあ。

澄子 (怪訝な顔をして) 亡くなられたのは、木村功さんじゃあないの？

吉江 ああ、そうだったの。木村さんなら、あそこは、ご両親が原爆でお亡くなりになったよ。

久子 そうだったわねえ。でも、あの人は原爆には遭っていないはずよ。海軍に行つてたから……。

吉江 そうかい、そりゃあよかつたね。だけど人間は、みんな死ぬるんだよ。御文章の『白骨の章』に「我やさき人や

さき、けふともしらずあすともしらず」というところがあ
るでしょ。それじゃあ私、お経を唱えてきますからね。

仏間へ行くのか、吉江は上手へ消える。

澄子 ……お母さん、ちよつと変じゃあない？

久子 そうなの、去年からボケ症状が出だしたような気がするの。テレビに向かって挨拶したりね。でも、お経は間違えないのよ。

澄子 八十歳なんだから、仕方ないのかなあ。私たちの家は、四百年来の浄土真宗の門徒だったわね。

久子 そうよ。でも、お母さんの仏教は、法事や葬式のためのものじゃあなくて、苦しい日々の生活に必要なものだったんだわ。

澄子 そうねえ、親鸞聖人ファンというところかねえ。たい
てい宗教には、男女格差・女性蔑視みたいなものがあるで
しょ。ところが、あの方にはそれがいいのよね。お母さん
にとつては、それが救いだったんじゃないの？

久子 女人正機とか女人往生というのは、女性を認めている
わけね。「善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」と
いう悪人正機説は、善人と悪人の差別もしないんだから、
すごい人だわ。

澄子 ボケる人もボケない人も、酒飲みも下戸も差別しない、
つてことですか。(笑い)

久子 きつと、そうね。いつかは私もボケるけど、広島カー
プを優勝させることも出来たわ。日本酒を洋酒に負けさせ
ちゃあいけないのよ。私は飲む酒も、雑誌の『酒』も続け
るわ。それが私の生涯なんだもの。

幕下りる

この戯曲では、ヒロインの佐々木久子と故人となられた文
壇関係者を除き、原則として変名を使いました。

ちなみに、清種徹宵師のモデルは清胤徹昭師であり、正式
に第十九世住職を継承されたのは昭和五十九（一九八四）年
ですが、戯曲の構成上、長光山正覚寺の本堂が鉄筋製に建て
替えられた昭和四十二年以後は、住職と呼びました。

なお、ボケという言葉は差別用語として非難されるかもし
れませんが、この言葉の出でくる昭和五十六年には、いま一
般化している「認知症」という用語は使われていなかったの
で、その点はご了承下さい。